聖風（せいふう）

2017年5月号

●発行責任者／院長 森下剛久　●編集／企画広報室　●編集協力／プロジェクトリンクト事務局

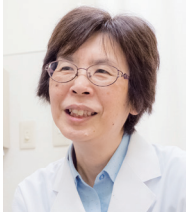
社会福祉法人聖霊会
聖霊病院
〒466-8633　名古屋市昭和区川名山町56番地
TEL 052-832-1181
http://www.seirei-hospital.org/

01

HOT NEWS

新生〈地域医療連携センター／患者支援室〉！看護師をはじめとした多職種が協力し、安心して入院生活を送れるように支援します。

昨年10月、地域の高度急性期病院との連携を強め、患者さんが不安なく当院へ転院できる体制を整えるため〈患者支援プロジェクト〉を発足しました。このプロジェクトは、これまで退院支援や福祉相談などを担ってきた地域医療連携センターを包含し、多職種で取り組むものになります。当院へ転院される予定の患者さん、ご家族とは転院前から面談を行い、病気になる前の生活の状態を教えていただくとともに入院生活や検査、手術などの説明を行っています。加えて近隣の福祉施設との連携も強化し、地域での当院の役割の構築に努めています。また4月には、地域医療連携センターを改編し、患者支援室が中心となり入院前面談を行っています。患者支援室には、改編前から入院前面談を担当していた看護師、退院支援を担当していた看護師など5名の看護師が所属しています。さらに患者さんの状況に応じてセンター内の医療ソーシャルワーカーとも協力し、支援を行っています。患者支援室の場所も患者さんやご家族が利用しやすいよう、2階から1階の玄関付近に移動しました。入院前から患者さんに関わり、入院中も退院に向けての支援を一つの部署で行うことで、退院後の生活の不安を取り除き、安心して入院生活を送っていただけるよう努めていきます。



副院長兼
地域医療連携
センター長
春原晶代

院長メッセージ Message of the hospital superintendent

平成29年5月
病院長 森下剛久

聖霊病院から新しい風をお送りします。

命の始まりから終わりまで、多種多様なステージにあるひとを大切に思う慈しみの心で、聖なる風を皆さまにお届けいたします。本年の病院訓は「為せば成る」です。どんなことでも強い意志をもってすれば必ず成就する、逆に受け身的・消極的な姿勢からは何も生まれないという上杉鷹山の名言です。英語で言えばaccountability、職員一人ひとりの個の力を存分に発揮して組織の力に繋げていこうという決意でもあります。今後ともよろしくお願いいたします。

聖霊シラバス
vol.1 小児科

小児食物アレルギー

病気の基礎知識

食物に対する免疫の過剰反応がアレルギー症状を引き起こします。

そもそもアレルギーとは何なのか。

人間は外敵から身を守るために免疫機能を持っており、異物のタンパク質を認識して攻撃します。アレルギーとは、この免疫が、問題のないタンパク質まで敵だと認識して過剰に反応すること。近年、アレルギーを抱える患者さんは増えており、世の中が過度に清潔になってきたことが一つの原因だといわれています。小児領域においては、気管支ぜんそく、アトピー性皮膚炎、そして食物アレルギーが3大疾患とされており、食物アレルギーでは、じんましん、喘息や喘息のような症状のほか、稀に生命を脅かすアナフィラキシーショックを起こすこともあります。

食物アレルギーの予防には、スキンケアが重要です。

食物アレルギーは乳幼児に多く発症します。乳幼児における主なアレルゲン（アレルギーの原因物質）は卵・牛乳・小麦。発症の経緯はさまざまですが、近年注目されているのが皮膚疾患です。湿疹などによって乳幼児の皮膚のバリア機能が弱り、そこからアレルゲンが体内に入ると、免疫がそれを敵と認識する場合があります。その結果、同じ成分を含む食物を初めて口にしたとき、食物アレルギーが発症するのです。実際、乳幼児を対象にした調査では、保湿薬などでスキンケアを続けると、食物アレルギーの発症が少なくなる可能性が指摘されています。

診療部長メッセージ

入院食物負荷試験と、専門医の目線で、不安解消をめざします。

第二小児科部長
谷田寿志
日本小児科学会専門医
日本アレルギー学会専門医

当院の小児科では、食物アレルギーへの対応に力を入れています。特に、食物経口負荷試験を積極的に実施。基本的に半日入院で、専門医・看護師を中心とした多職種の管理のもと、安全な検査を行っています。また、当院では、地域の診療所と連携して〈直接入院食物負荷試験〉を導入。診療所から患者さんの入院依頼がある場合、一般的には、入院前に一度外来受診が必要ですが、このシステムでは、診療所から直接、入院予約が可能で、患者さんは1回の来院（入院時）で負荷試験を受けられます。

食物アレルギーは、食事という日々の行為にリスクがあるので、ご家族に過度な不安を招きます。当科では、正しく状態を把握し、専門的知見に基づき、その不安を解消できるよう一緒に考えていきます。お子さまの食物アレルギーでお困りの方は、ぜひ当院にご相談ください。

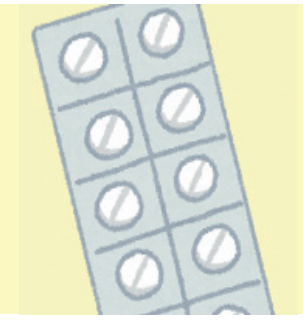
治療の基礎知識

「食べない」から、「可能な量を食べ続ける」へ、治療方針は変化しています。

小児食物アレルギーの治療法。

食物アレルギーを発症してじんましんなどの症状が出たお子さまには、抗ヒスタミン薬やステロイド薬などを処方します。抗ヒスタミン薬は軽いじんましんなどに、ステロイド薬は全身の比較的強い症状が出たときに用います。

食物アレルギーは成長に伴って治る可能性が高く、一度発症したお子さまでも、5歳頃になると5〜6割は症状が出なくなります。また、以前は症状が出た食物を除去するのが一般的でしたが、最近では食べられる量を早期に調べ、その量を毎日のように食べ続けることで許容量を増やすことが取り組まれています。



大切なのは、アレルギーの状態をきちんと知ること。

食物アレルギーとうまく付き合うには、アレルギーの状態を知ることが第一です。そのため、症状が出ない許容量を確定する「食物経口負荷試験」を受けることをお勧めします。負荷試験とはアレルゲンを含む食物を実際に食べて行う試験。たとえば卵の場合、茹でた卵白を、お子さまの検査数値や病歴、状態を加味し、1グラム、2グラム…と段階的に摂取量を上げ、どのレベルで症状が出るのかを見極めます。負荷試験によって食べられる量を把握すれば、過剰に心配することもありませんし、継続的に食べることで許容量を徐々に増やしていける可能性も充分にあります。

お子さまはもちろん、ご家族の不安にも寄り添います。

看護部
4階病棟
（小児科病棟）
小林 恵

Talk 01

小児科病棟には、負荷試験を受けるお子さまが多くいらっしゃいます。私たちは、負荷試験をプレイルームで行うなど、できるだけお子さまがリラックスできる環境を整えるとともに、ご家族とも密にお話をさせていただき、不安な気持ちを一人で抱え込まなくて済むように、寄り添い支えます。

栄養の専門家として、ご家庭の食生活を守ります。

栄養科
管理栄養士
河野桃子

Talk 02

お子さまが食物アレルギーを発症すると、ご家族は食べさせてよいものの判断に悩んだり、お子さま向けの献立を用意したりと、大きな負担を抱えます。私たち栄養士は、そういった悩みをお聞きし、〈安全〉と〈豊かな食生活〉の両立に向けて、具体的な献立のアドバイスを含め支えていきます。

病院からのお知らせ

01 新任医師紹介

小児科

山本和之
NICU管理部長
（平成29年4月～）

専門は主に新生児です。周産期医療は、この病院の柱の一つであり、より良い医療を提供できるように頑張りたいと思います。

歯科口腔外科

浅井英明
歯科口腔外科部長
（平成29年4月～）

専門は主に歯科口腔外科一般です。地元名古屋で地域医療に貢献したいと思っております。

杉山昌彦
（平成29年2月～）

専門は主に口腔外科一般から顎関節疾患です。地域医療に貢献することができるように日々精進してまいります。

眼科

小南 梓
（平成29年4月～）

専門は眼科一般です。少しでも早くなれて皆さまのお役に立てるよう努力してまいりたいと思います。

02 スウェーデンからAnders Jonsson先生が来日。整形外科・青木良記医師等と友好を深めました。

平成29年1月20日、スウェーデン第2の都市ヨーテボリのサルゲンスカ大学付属ムンドル病院よりAnders Jonsson先生が当院大腿骨近位部骨折センターを訪問されました。Jonsson先生は、私の欧州留学時に指導いただいた医師の一人で、年間1,200例の大腿骨近位部骨折を治療している整形外傷医です。スウェーデンでの大腿骨近位部骨折の治療戦略を講演いただくのと同時に、私から当センターでの取り組みをお伝えしたほか、手術室スタッフとの意見交換や当院施設を見学していただきました。こうした交流を継続していけることをうれしく思っています。（整形外科医・青木良記）

（左から）Mr. Henrik Hansson、青木医師、Dr.Anders Jonsson

03 イベント開催のお知らせ

シニア世代向け講座（昭和区東部いきいき支援センター主催）
当院の骨粗鬆症チームの看護師、理学療法士等が講師を担当します。

日時 6月2日（金）14時～16時（受付:13時30分～）
場所 イオン八事店　4階イベントスペース

第2回　地域健康ふれあいフェスタ（病院祭）
いりなか商店街発展会と当院の共催で開催します。

日時 6月17日（土）10時～15時（予定）
場所 聖霊病院 1階・2階

編集後記

先輩たちが発行してきた「聖霊だより」は、今その伝統を受け継ぎ「聖風」として生まれ変わりました。新たな名称は院内公募により決定。院長の挨拶にもあるように、新しい風をイメージした、読まれ親しまれる広報誌をめざします。職員はもとより読者と当院との絆を大切にしてここにリニューアルの1号を5月の爽やかな風に乗せて発行いたします。定期発行（今年度は3回予定）を楽しんでいただければ幸いです。

企画広報室（加藤・服部）